自然と人間との共生

KOSMOS

第16号

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

EXPO'90 FOUNDATION

こすもす
2025
秋

日本人の作法

伝統園芸・果樹・野菜

伝統文化としての園芸を考える

浮世絵が伝える江戸の園芸事情

日野原　初めて平野さんにお目にかかったのは、私が学芸員として勤務する太田記念美術館で園芸にフォーカスした浮世絵展を開催（二〇〇九年）した時でした。

平野　江戸時代の園芸文化の有り様を浮世絵だけで見せるというのは、私の記憶ではそれまで例がなく、私自身も構想していたテーマだったので、「やられてしまった！」とショックを受けたことを覚えています（笑）。

日野原　日本人は万葉の昔から四季の移ろいを愛で、自然を歌に詠んできました。そうした自然観から、工芸品なども含め、日本美術では樹木や草花、鳥や昆虫、魚などの動植物を描いた花鳥画が重要な役割を担っていました。ただ浮世絵には、そうしたものとは別に、庭先で植物を栽培したり、花見に出かけたりと、自然や園芸が生活の一部として描かれているものが一定数あって。浮世絵の題材の多くは庶民の暮らしぶりや娯楽ですから、当時園芸というものがいかに庶民の暮らしに根づいていたかを物語っていると思うのですが、平野さんはどうお考えですか。

平野　江戸時代の園芸が庶民の文

『浮世絵でめぐる江戸の花
～見て楽しむ園芸文化』（誠文堂新光社）
著者：日野原健司　平野恵

［巻頭特集］

日本人の作法
伝統園芸・果樹・野菜

四季の移ろいの中に身を委ね、自然と共に生きてきた日本人。季節毎の動植物の特徴を観察していた感性は、花や葉のネジレや斑入りなどの不完全な自然を美と感じ、散り際さえ無常観として心を映した。この号では、江戸期に隆盛を極めた園芸や野菜、果実を通し、自然を読み取り共鳴する文化、四季と共に暮らす美意識、さらに自然への敬意から生まれた振る舞いに目を向ける。

KOSMOS
こすもす 2025年秋　第16号

2 ［巻頭特集］
日本人の作法
伝統園芸・果樹・野菜

3 ［対談］
伝統文化としての園芸を考える
平野恵 × 日野原健司

11 ［探求コラム］
中村一
江頭宏昌
髙橋勉

14 ［私を育てた＜風と景＞］
清流と羽音に導かれて
── 自然とのつながり、農山村の先人への憧憬
大和田順子

16 ［いぶきの輪っか］
日本の風土が紡いだ伝統の野菜や果実
林良博

18 ［近代学匠伝］
コスモス国際賞
2014年受賞者
フィリップ・デスコラ博士

21 ［日本植物紀行］
シーボルトが愛した「ユリの女王」
カノコユリ

22 ［協会事業紹介］
普及啓発事業
自然と人間との共生フォーラム

24 ［日本の伝統園芸植物］
のとキリシマツツジ
能登の風土や歴史、美意識を今に伝える「生きた文化財」

［写真］六義園（東京都文京区）

化だったという通説については、「園芸の文化史」を研究する立場からするといささか懐疑的です。武家から町人に広がっていったことは確かなのですが、果たして長屋住まいの庶民まで楽しんでいたのかとなると、それを証明する文献がありません。今日は文京区の「六義園（りくぎえん）」にお邪魔していますが、ここはもともと、五代将軍徳川綱吉の側用人だった柳沢吉保の下屋敷でした。吉保は自ら庭園を設計するほどの園芸好きでしたが、その孫の信鴻（のぶとき）もこれに違わず、自著の『宴遊日記』には、縁日の植木市で値段交渉をする様子まで書かれています。では、どこそこ長屋の何兵衛の日記が残っているのかというと、それは難しい話です。

一方で、浮世絵が持つ説得力には感服するばかりで、特に幕末に近づくにつれ、地誌などほかの情報媒体の記事が画一化していく中で、浮世絵は当時の園芸事情を事細かに伝える数少ない媒体となっていきます。以前、日野原さんと園芸の浮世絵本を書きましたが、古くからある花の名所でさえ、浮世絵から得られる情報が少なくないことに改めて気づけたのは、うれしい驚きでした。

鉢植えの登場で園芸は市民の娯楽へ

日野原　園芸が絡んだ浮世絵には植木鉢が頻繁に登場します。早い時期だと一七八〇年代に鳥居清長が描いた『風俗東之錦（ふうぞくあずまのにしき）　植木売り』がありますが、この頃に描かれていたということは、植木鉢が一八世紀後半くらいには人びとの暮らしの中に浸透し、身分の垣根を超えて園芸が広く楽しまれていたと想像できます。

平野　考古遺物では一八世紀半ばくらいのものが出土していますね。普及したのは一九世紀に入ってからだと思うのですが、ちょうど一八世紀後半から町人階級にも富裕層が増え始めるので、庭のない場所でも植物の栽培や鑑賞が楽しめるツールとして一般市民への販売が始まったと考える方もいます。

日野原　浮世絵に描かれているような高価な磁器はインテリアにもなりますし、鉢植えの登場によって花を「飾って愛でる」という新たな風習がつくられていったと仮定すると、そこには野の花を観賞するのとは違った感覚が生まれていたとも推察できます。

平野　それには、変化朝顔の出現が大きく影響していると思うんです。それまで野に咲いている自然の姿を美しいと感じていたのが、一八世紀なかばに遺伝子が変異した品が見つかり、一九世紀になると花や葉に斑が入ったものだったり、先が細くなったものだったり、珍しい朝顔が出てきて、「奇品・珍種」といいますが、変わったもの、珍しいものを追い求めるようになっていきました。その朝顔と同時期には万年青（おもと）とか、松葉蘭とか、花の咲かない植物の葉を鑑賞する文化も生まれました。

日野原　万年青の鉢植えなどは百両や二百両、現在の価格に換算すると時には数千万円単位で取引されることもあったといわれていますね。「園芸に手を出すと身上を潰す」といわれていたのも頷けます。

平野　そしてついに、万年青の栽培や販売を禁止するおふれが出されるわけですから、いかに法外な金額で取引されていたかわかりますね。それまで武家の庭園を手掛けていた植木屋が鉢植えの商売をするようになったことが大きいと思っています。

江戸時代の主な花の流行とその時代

花	元号（西暦）
椿、牡丹	寛永（1624年～）
菊、花菖蒲、桜草	元禄（1688年～）
朝顔（第一次）	文化・文政（1804年～）
菊細工（第一次）	文化・文政（1804年～）
万年青、松葉蘭	文政（1818年～）
菊細工（第二次）、菊人形	天保15（1844年～）
朝顔（第二次）	嘉永・安政（1848年～）

喜多川歌麿・画「娘日時計 辰の刻」（1794年頃）、（東京国立博物館所蔵）　出典:ColBace
辰の刻とは、今でいう午前8時頃。午後にはしぼんでしまう朝顔を見ようと、右の女性は房楊枝（歯ブラシ）を口にくわえ、まだ歯磨きの最中。鉢に装飾はないが素焼きの鉢より上等で、大切に育てているのがうかがえる

人びとを熱狂させ、栽培に駆り立てた変化朝顔。文化・文政期と嘉永・安政期の江戸期における二度にわたるブームを経て、現在もマニアの間で栽培が盛ん

江戸の園芸文化は多彩な教養の結晶

平野　変化朝顔のあたりからは、自分で栽培した奇品の出来を競う品評会、「花合わせ」が盛んに行われるようになります。

日野原　どんな人たちが出品していたんですか。

平野　最初は大名とか旗本クラスだったと思います。そのうちいろいろなところで園芸サークルのようなマニアの集まりが出来上がり、切磋琢磨して発展していったんでしょう。植木鉢も高価なものを使って、出品する〝作品〟を描いた「番付」（今でいうチラシのようなもの）を刷って配ったりもしました。それもただ植物を描くだけじゃなくて、狂歌を添えてみたり、俳句を添えてみたり。万年青の「葉形六歌仙」という番付では、六種類の万年青を平安時代に活躍した六人の歌人「六歌仙」に喩えて歌とともに紹介しています。こういうものがあるから、江戸時代の園芸は面白いんです。

日野原　同感です。園芸の世界と文芸の世界、いろんな教養がミックスされている。絵もそうですね。「葉形六歌仙」でいうと彫り摺りも丁寧だし、絵の具もちょっと良いものが使われています。わざわざお金をかけてこういう美しい印刷物を作り、記念品として手元に残すという。江戸時代の園芸文化

万年青の番付「葉形六歌仙」（個人蔵）
万年青の鉢植えを、平安時代の優れた6人の歌人、僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主に喩え、それぞれの和歌が添えられている。植物と植木鉢の取り合わせも楽しみの一つ

とは、まさにさまざまな教養の結晶という気がしますね。

平野　大河ドラマの「べらぼう」に登場した狂歌師の大田南畝（なんぽ）も花好きで知られています。特に変化朝顔が好きだったようで、朝顔の品評会で知り合った人と夜遅くまで酒を飲んで昼まで眠りこけ、「朝かと思ったらもう昼か」と朝顔にひっかけて言ったというような逸話が残っています。

日野原　大田南畝は寛政の改革で狂歌を辞めたことになっていますけど、その後も文化的な活動を続けていますよね。

平野　『あさがお叢（そう）』という変化朝顔を版画で描いた図譜があるんですけど、そこにも序文を寄せています。序文やら跋（ばつ）文やら、あちこちで書きまくっています。

日野原　狂歌師は本名ではなく、狂号と呼ばれるペンネームを使っていますから、「蜀山人（しょくさんじん）」という別号で狂歌も詠んでいました。教養のある層の中でずっと活躍していて、その世界の中に園芸もあったんでしょうね。園芸マニアだけじゃなく、いろんな知識人が文化的につながって、それぞれの関心で楽しんでいたというのも面白い現象だと思います。

歌川芳虎・画「新板　植木つくし」(1857年)
出典：国立国会図書館
江戸時代には、子ども向けに昔話や物語、動植物などを1枚の画面の中に所狭しと描いた「おもちゃ絵」と呼ばれる浮世絵も多数制作された。鉢植えの植物を扱った作品も多く、園芸植物の栽培にいかに植木鉢が重要であったかを物語っている

地域活性化にも ひと役買った菊細工

日野原　浮世絵にはよく菊も描かれています。日本には昔から九月の「重陽の節句」に菊を観賞する風習があって、人びとの暮らしに身近な花という印象があります。平野さんは菊の番付の研究もされていますよね。

平野　菊細工の番付ですね。菊も、もともとは自然に咲き乱れる姿を愛でていたのが、江戸中期になると、巣鴨から染井（現在の駒込）辺りに集まっていた植木屋が寺社の境内や自庭に菊で花壇をしつらえるようになり、その一帯が菊の名所になっていくんです。さらに鉢植えが普及し始める一九世紀頃になると、今度は菊の花で富士山や宝船なんかを造りはじめる。後にこれが菊人形に発展していきます。

日野原　菊花壇でも見物客はやって来るけれど、もっと大勢人を集めようと？

平野　番付は集客のためのビラですね。植木屋たちが協力して作っていたと思うんですが、デザインもいろいろ工夫されていて、名所を順番に回れるようになった双六形式のものもありました。江戸の人たちはそれを持って今の文京区や豊島区に遊びに行き、日がな一日、菊細工巡りに興じたんでしょうね。しかも入場料というものがなかったので、無料で楽しめました。

日野原　文京区も豊島区も今は山手線の圏内にありますが、当時は郊外ですよね。休日にちょっと遠出して楽しむ感覚ですかね。ただ菊細工ってすごく手が込んでいますよね。それを無料で開放する目的は何だったんだろうと思いますね。

平野　ある年は百種類の番付が作られたという記録もあります。そこまでして植木屋にどんなメリットがあるんだろうと。私は、菊はもちろん松や梅などの苗を売っていたんじゃないかと思っていますが、ほかにも新しく団子屋ができたりして、お金が落ちる仕組みがあったようで、地域活性化のためのイベントだったのでしょう。

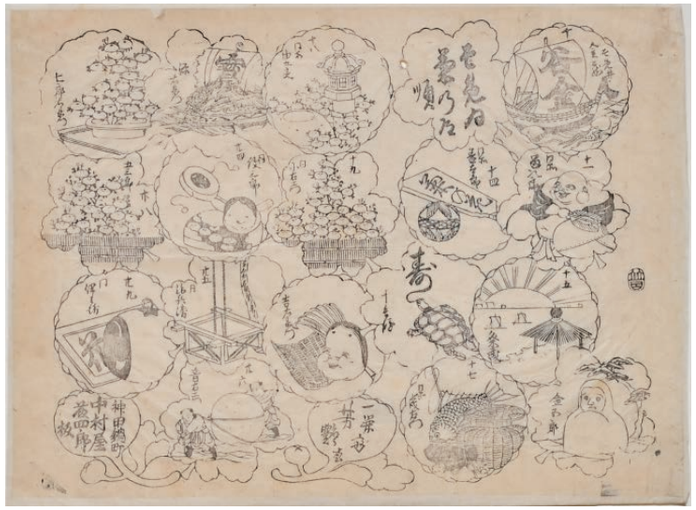
日野原　その光景を狂歌や俳句に詠む人たちがいて、浮世絵に描く絵師もいて。それを目にした人たちが、「ちょっと観に行こうか」と、また足を運ぶ。浮世絵などは植木屋がスポンサーになって描かせたケースもあるのかもしれませんが、今でいうSNSのような循環が、身分も立場も超えてあったというのは、海外に目を向けてもあまり例がない。

　鎖国状態にありながら世界の最先端を走っていたのかと考えると、つくづく、現代の私たちも学ぶことの多い時代だと思います。

一つの株から 百種類の菊を咲かせる

平野　菊の浮世絵でいうと、私は歌川国芳の『百種接分菊（ひゃくしゅつぎわけぎく）』が大好きです。見ているだけで楽しくなります。

日野原　一本の株から百種類の菊



菊細工の番付（個人蔵）
菊細工は年ごとに出し物が異なり、毎年何種類もの番付が作られた。9〜11月にかけて徐々に刷られ、そのたびに情報量も増えていった

日野原 健司（ひのはら・けんじ）
1974年千葉県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科前期博士課程修了。太田記念美術館主席学芸員、慶應義塾大学非常勤講師、JGN創設メンバー。江戸から明治にかけての浮世絵史、出版文化史を研究。学芸員として「江戸園芸花尽くし」「江戸妖怪大図鑑」などの展覧会を開催。『かわいい浮世絵』（東京美術、2017年）ほか著書多数。

歌川国芳・画「百種接分菊」(1845年)
出典:国立国会図書館
駒込伝中の植木屋が1本の菊より接ぎ木して百種類の花を咲かせたものを、見世物パフォーマンスとして描いた。右端に番付を見る見物客もいる

の花が咲いていて、それぞれに短冊が添えられ、花銘が書かれている。まさに当時の園芸文化を紹介するにはわかりやすい作品です。

平野　ただ、ほんとうに百種類咲いたのかというと、これまた疑わしい。種類が違えば開花時期も異なりますから、どうせ絵空事だろうと思って短冊を数えてみたことがあるんです。そしたらきっちり百枚あって（笑）。短冊に書かれている菊の名前も調べたところ、これもちゃんと存在していました。

日野原　国芳は両国なんかで行われていた独楽（こま）や綱渡り、軽業なんかの見世物もたくさん描いています。恐らくその流れで、当時流行した市民たちの娯楽として描いたのだと思いますが、絵の素晴らしさもさることながら、こうした菊を作る栽培技術があったことに、ただただ驚きます。

平野　その技術も一度は廃れてしまいましたが、二〇〇四年の『しずおか国際園芸博覧会』で再現され、その後ニューヨークやフランスのヴェルサイユでも展覧会が行われています。本当に素晴らしいことで、歌舞伎や浮世絵同様に、広く世界にアピールできる文化だと改めて強調したい。

日野原　こういうものを見ると、先ほど変化朝顔の話がありましたが、江戸時代の人たちというのは珍しいものを追い求める気持ちがよほど強かったのだろうと思いますね。

平野　根底には本草学の影響があるのではと考えています。中国から入ってきた学問で、朝鮮人参などの珍しい植物を観察して効能などを研究する。朝顔も最初は漢方薬として研究されていました。

日野原　もともとはそうですよね。人間の生活に役立つ植物や鉱物を探そうとする本草学と、日本全国に分布する植物や鉱物、動物を体系的に整理しようという博物学的な活動が、一八世紀の中頃から一九世紀にかけて発展していきました。ちょうど人びとの関心が園芸に向かっていった時代とも合致しています。

平野　おっしゃるとおり、薬になるものを探していたのが、自然にあるものを全て記録しようという博物学的なものに変わり、変化朝顔が出てきた時も、博物学的興味からそれを記録しようとする本草学者もいました。なんでも見てみよう、分類する前に記録しようとする探究心に、日本人のすごさを感じます。

日野原　同じ頃、絵師にも変化が訪れています。絵の学習法としては、長らく師匠の作品やほかの絵師の描いた作品の模写が主流でした。それが一八世紀の中頃になると、動物であれ植物であれ、自分の目で実物を観察して、ものの動きを捉えないといけないという考え方に変わっていきます。伊藤若冲（じゃくちゅう）が鶏の絵を描いていますが、なぜ鶏なのかというと、虎や龍は不可能だけど鶏なら飼えるということで、実際に庭で飼っているんです。気韻生動という、モチーフの生命力をいかに生き生きと描くかということが大変重要視されるようになりますが、その基礎には、しっかり観察する、スケッチを重ねて記録するというプロセスがあるのだろうと。浮世絵となるとまた少し違ってくるのですが。

平野　鉢植えを買っているのがやたら女性というのも疑問です。ひょっとしたら男性の方が多かったのではと思いますが、そのまま描いたのでは華がありませんから。

日野原　厄介なことに、浮世絵では見た目重視で登場人物を女性に置き替えるということが間々あります。

平野　いずれにせよ、江戸時代の園芸文化がこれほどまでに花開いた根っこには、日本人の底知れぬ探究心があったことは間違いないでしょう。

変わりゆくもの 変わらないもの

平野　朝顔にしても菊にしても、江戸時代にはたくさんの品種が栽培されましたが、共通しているのは、花や葉の「変化」に重きをおいたこと。これも、「完璧な形」や「均一な美しさ」をよしとする西洋の園芸とは一線を画す点です。

日野原　アヴァンギャルドに見える江戸の園芸にも、根底には侘び寂びといいますか、移ろい、やがては消えていくことを美しいと感じた古くからの日本人の自然観、美意識が息づいているということでしょうか。

平野　そうですね。朝顔も菊も、散るまでにさまざまな変化を見せる「狂い咲き」のようなものも作ら。

平野 恵（ひらの・けい）
明治大学大学院博士前期課程修了、総合研究大学博士後期課程修了。博士（文学）。文京ふるさと歴史館専門員、明治大学兼任講師などを経て、現在は台東区立中央図書館郷土・資料調査室専門員、武田科学振興財団杏雨書屋運営協議員など兼務。近世日本文化史、思想史を専門とし、国立歴史民俗博物館くらしの植物苑展示プロジェクト委員として朝顔や菊の展示を担当。著書多数。

肥後菊（ひごぎく）
一重咲きで花形は平弁か筒弁、花弁は重ならず、間がすけているのが特徴。「肥後六花」と呼ばれる熊本を代表する花の一つで、肥後の名藩主といわれた細川重賢が奨励して栽培が始まったと伝えられる

江戸菊（えどぎく）
咲き始めから舌状花の花弁が徐々に立ち上がり、筒状の花を抱え込むように折れ曲がったりねじれたりしながら、花の終わりまで芸（変化）が楽しめる。文化・文政期（1804～1830年）頃から江戸で大流行した

られています。私は国立歴史民俗博物館のくらしの植物苑（千葉県佐倉市）という庭園の委員を三十年近くやっていて、二〇〇〇年から菊花壇や菊人形にも使われた古典菊の収集を行ってきました。つい最近も展覧会を行ったのですが、そこでも紹介した「江戸菊」もそうですね。どんどん花弁が変化していきます。

日野原　面白いですね。変化を尊ぶということは、人間が創造したものでありながら、むしろ自然を受け入れ、共に生きているという感覚があります。

平野　ただ古典菊の中には、門外不出にも関わらず、類似品が我が物顔で出回っているものもあり、少し残念な状況です。それぞれ栽培法が確立されていて、大切に保存されてきたのですが、高齢化により鑑定できる人も少なくなってきました。

日野原　高齢化はどこの業界も直面している問題ですね。

平野　菊人形も今、絶滅の危機にあります。あれは植木屋さんなら誰でもできるわけではなくて、菊師という専門の職人が担ってきました。こちらも高齢化で、有名な大阪枚方の菊人形展も大幅に縮小されました。

日野原　まずは若い人に興味を持ってもらわないと、ということですね。身近に親しめるものがあるといいのですが。

平野　漫画やアニメの題材として取り上げてもらえると、一気に浸透しそうです。

日野原　まさに現代の浮世絵ですね。園芸への興味というのはいつの時代にも根強くありますが、栽培や鑑賞を楽しむことはもちろん、私たちの祖先が何を守り、何を伝えようとしていたのかを知ることにも目を向けられると良いですね。人と自然の未来への道しるべは、そうした歴史の中にこそあるのではないでしょうか。園芸や庭づくりは単に植物を育てる行為ではなく、花や緑の前に身を慎み、節度ある自然との交歓であり、謙虚、清らかさ、慎ましさと深く結びつくと思います。

平野　植物の性質を理解して扱うこと、道具を綺麗に保つこと、植物への敬意や季節感を大事にすること。これらは、日本人の自然への大事な作法ですね。

対談が行われた六義園（東京都文京区）の心泉亭にて。六義園に近い染井村（現：駒込）は、ソメイヨシノ発祥の地とされ、江戸中期から明治にかけて園芸の街として栄えていた。

探求コラム 1

造園と庭園、その起源にひそむ日本の精神

中村 一
京都大学名誉教授・農学博士

庭を造ることは風景をつくること

造園という言葉が日本に普及したのは意外にも近年である。大正時代に造園という言葉が突如として浮上し、大正十四年には日本造園学会が創設された。その源泉を辿ると、行き着く先は米国である。ニューヨークのセントラルパークを設計したフレデリック・ロー・オルムステッドが十九世紀後半に自らの仕事をランドスケープ・アーキテクチャーと名付けた。公園を設計し風景をつくる…その翻訳として「造園」が生まれた。すなわち造園とは単に庭園や公園を設計するにとどまらない「風景の創造」が語源である。

一方で、庭園はどうだろう。にわの古い発音はニハであり、万葉集にも登場する。

武庫の海の
ニハよくあらし 漁する
海人の釣り舟 波の上ゆ見ゆ

海のニハとは漁場、テリトリーのこと。やがて意味が転じ、家の周囲の土地、さらには貴族や支配階級の私有地を指すように。垣や塀で囲われた領域を「ニハ＝庭」と呼ぶようになった。ニハはいわば生活環境そのものを表していたのだ。この古代のニハが、現代まで庭という語に受け継がれているのは、世界の庭園文化史上でも珍しく、かつ意義深い。「庭を造る」という語句の中に、すでに環境デザインという思想が先取的に込められているのだ。

日本庭園の源流にある「ニハ」と「シマ」

古代の貴族たちはニハを、単なる領域から庭へと発展させていった。そこには祭司や政治のための場、菜園・花園・果樹園などの部分、そして「シマ」と呼ばれる空間があった。シマとは庭の芸術性や思想性を担い、海や宇宙を象徴的に表現するものであった。池を海に見立て、岸に小石を敷いて洲浜を築くことで、雄大な自然風景を限られた敷地の中に再現したのである。このような洲浜による縮景の表現こそが日本庭園様式の起源といえるだろう。

日本庭園の様式が完成するのは平安時代である。例えば毛越寺、浄瑠璃寺、大覚寺、そして平等院の庭園などがその好例である。平安後期に書かれた「作庭記」は今日にいたるまで日本庭園の最高の指導書であるが、その中にも洲浜についての記述が非常に多い。

私は九十四歳になるが、構想十五年をかけた人生最後の庭園が昨年完成した。大阪府茨木市にある神峯山 大門寺の日本庭園である。広大な海を模した池をつくり、中島や洲浜を配した風景には、私がこれまで培ってきた知識と思いのすべてを込めている。

神峯山 大門寺の日本庭園

なかむら・まこと
一九三一年生まれ。京都大学名誉教授、農学博士。日本造園学会会長も歴任。主要作品は米国ドーズ樹木園内日本庭園、姫路市好古園など。著書は「造園の歴史と文化」（共著）ほか。

探求コラム 2

地域で生きる知恵を伝える伝統野菜、在来品種

江頭　宏昌
山形大学教授

昔ながらの在来品種に先人たちの知恵がある

戦前まで日本各地で食べられていた野菜の多くは自家採種によって維持されてきた固定品種で栽培者の感性と地域の風土に適った在来品種であった。戦後以降に普及した優秀なF1品種は、在来品種に比べて収量性・耐病性が高く農家が栽培しやすい、見栄えや日持ちが良く市場価値が高い、味にクセがなく品質にばらつきが少ないので消費者が手に取りやすいといった特徴をもつ。産業的に圧倒的に優位なF1品種が一般化するなかで、在来品種は次第に姿を消してしまった。決してだれが悪いわけではない。人間がより良い生活を求めて合理的判断・選択をするのは当然な流れである。

さらに栽培技術が進み、いつでも、どこでも容易に栽培でき、食べたいものが何でも手に入る時代になった。その結果、代々伝えられてきた採種技術や栽培適地の見極め方、旬の時期や、また食べきれないほどの食べ物をどうすれば無駄なく保存できるのか、そうした自然に寄り添って生きるための知恵を多くの人が忘れてしまった。

野生のカブ「ウディ」のみそ漬け（沖永良部島）

野菜はかつて季節を映す暦だった

在来品種、伝統野菜を栽培する人は地域で生きるための知恵を伝えてきたのではないか。そう考えた私は平成十四年ころから山形県内の在来野菜の栽培者を訪問するようになり、やがて調査地は日本全国に広がった。

固定種のダイコンやカブの種子を採るための種子親を選ぶときは、理想的な形態の個体ばかりを選んではいけない。相互交配させる集団の中に少し異形種（形態が異なる個体）を混ぜないと集団を健全に維持することが難しくなる。こんな話は桜島大根の生産現場や焼畑でカブを栽培してきた古老など、あちこちで聞いた話だ。これは他殖性集団で雑種強勢を発揮させ、近交弱勢を回避する知恵である。

カブはその大切さが忘れられてしまった野菜である。驚くことに北海道から沖縄までほぼ全国に百種類近い在来品種がある。それはなぜなのか。生育期間が一、二カ月と短く、寒さに強いので、飢饉回避や食べ物が不足する季節に備えるためだったのだ。カブは漬物や切り干しにして保存し、葉も干して食べた。沖縄の在来カブ、インリーは真夏や台風など野菜が不足するときに備えて、ふしかぶ（干しカブ）にした。

サトイモは湿地を好む作物である。伝統的な産地はたいてい、豊かな土壌が堆積して水を得やすい川のすぐ近くにある。九州などでは山間地の焼畑でも栽培されたが、多少湿り気のある場所を選んで植えたはずである。サトイモの仲間のコンニャクも、モウソウチクの竹林も、先人たちは山の斜面を走る水脈を読んで植えたのではなかろうか。

伝統野菜、在来品種がなぜそこに伝わっているのかを考える。そこからみえてくる先人たちの知恵が実に面白いのである。

えがしら・ひろあき
一九六四年福岡県生まれ。専門は植物遺伝資源学。国内在来品種の調査・保存活動を行うとともに農林水産省の受託研究で「在来品種データベース」を構築。現在三百品種以上の情報を公開。

探求コラム 3

皇居東御苑果樹古品種園について

高橋　勉
宮内庁管理部庭園課課長補佐

皇居東御苑で栽培する伝統の果樹

皇居東御苑は、旧江戸城の本丸、二の丸、三の丸の一部を宮殿の造営にあわせて皇居附属庭園として整備されたもので、昭和四十三（一九六八）年から公開されており、出入りは大手門、平川門、北桔橋門となります。（休園日は月曜日と金曜日を基本とするものの休日や行事等により例外があり、開園時間も時期により異なりますので、ホームページ等でご確認お願いいたします。）

皇居東御苑の本丸南側一画には、江戸時代からある品種の果樹古品種園が整備されており、様々な品種の果実があり結実の時期も異なることから、年間を通して入園者の目を引いています。

食用の植物は、より美味なものやより生産性の高いものが栽培されるようになると、古い品種はすたれてしまい、一般には見ることができなくなってしまいます。

果樹古品種園は、江戸城の跡である皇居東御苑にかつて食用として栽培されていた江戸時代の品種である果樹を植えれば、訪れる人々にとっても興味深いことではないかという上皇陛下のお考えを受けて、整備されました。

整備は、平成十九年度から平成二十一年度にかけて土壌改良と植栽を順次行い、平成二十三年度及び平成二十四年度には周辺園路とのバリアフリー化を進めました。

上皇上皇后両陛下の皇居東御苑におけるご植樹
写真提供：宮内庁

果樹古品種園は東側と西側の二箇所に分かれており、果樹古品種園（東）にはナシ、モモ・スモモ、カンキツを、果樹古品種園（西）にはカキ、ワリンゴを、それぞれ一団となるように植栽しています。

上皇上皇后両陛下は、果樹古品種園の整備を記念して、平成二十年四月及び平成二十一年三月に果樹古品種園においてナシ、カンキツ、カキ、ワリンゴを植樹されました。

皇居東御苑に来られた際には、上皇陛下の来園者への思いから生まれた果樹古品種園に是非足を運んでいただければと思います。

植栽果樹古品種

植栽された古品種は、（独）農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所に保存されていて苗が入手可能な品種のうち、各種類の地域性、相性、栽培実績などを勘案して、以下の五種類、計二十二品種が選定されました。

一．ナシ（五品種）
淡雪、今村秋、大古河、類産梨、六月梨

二．モモ、スモモ（四品種）
薬缶、おはつもも、米桃、万左衛門

三．カンキツ（五品種）
紀州ミカン、臭橙、三宝柑、クネンボ、江上ブンタン

四．カキ（五品種）
禅寺丸、豊岡、堂上蜂屋、祇園坊、四溝

五．ワリンゴ（三品種）
加賀藩在来、リンキ、高坂リンゴ

たかはし・つとむ
二〇〇〇年宮内庁に入庁し、管理部庭園課に配属され皇居や赤坂御用地を担当する他、宮内庁京都事務所や環境省を経て現職に至る。

私を育てた
〈風と景〉

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かびあがる「心象風景」……。大切な「風と景」について語っていただきます。

清流と羽音に導かれて
――自然とのつながり、農山村の先人への憧憬

大和田順子　教育テック大学院大学 教授

渓流釣りをする父。猟犬を連れてのハンティングなどとにかく山や自然が大好きな人だった

昭和四十年ごろ、父に連れられて「早戸川国際マス釣場」を訪れた。丹沢の山並みを抜けた渓流は、澄んだ水が石を打ちながら流れ、陽射しにきらめいていた。水音と鳥のさえずり、頬に触れる山風。糸を垂れた数分後、銀色のマスが跳ねて水しぶきを浴びたときの輝きは、今も鮮やかに蘇る。

父に連れられ自然を謳歌

父は終戦後、鹿児島県鹿屋の特攻隊基地からなんとか東京に戻ったが、敗戦直後の混乱の中、日本人から迫害を受けることもあったそうだ。その後、府中の米軍基地にあったチェースマンハッタン銀行に勤め、アメリカ人と接するようになった。平日は銀行員として働きながら、週末は山や川、海に足を運び、釣りや狩りに没頭していた。丹沢のマタギに教えを請い、燻製や山菜の知恵を学び、竹を削って釣竿を自作するほど凝り性だった。

そんな父に連れられて、私たち兄弟も野山や川の自然に親しむようになった。春先には多摩地域の里山に出かけ、湿った土の匂いに包まれながら山菜を探した。田んぼのあぜに顔を出す小さなふきのとうを見つけたときの喜びと、掌にのせたときに漂うほろ苦い香り。その一瞬は私にとって「発見の喜び」の原点となった。

雑木林では山ぶどうの蔓が膨らんでいる部分を探す。中に入っているブドウムシはマス釣りの餌だ。早戸川で釣ったニジマスは家に持ち帰り、父の手ほどきで燻製を一緒に作った。煙の香りが衣服にしみ込み、やがて飴色に透きとおった魚がリビングの暖炉のそばに吊るされた。ストーブの炎、燻製の深い旨味は今でも蘇る光景だ。

マガンの地に魅せられて

こうした体験は、私の中に「自然への憧憬」と「アメリカへの憧れ」を同時に芽生えさせていた。やがて四十代の二〇〇二年、私は「ロハス（LOHAS）」という概念に出会う。元ヒッピーと呼ばれた人々が提唱したそれは、有機農業や自然エネルギー、ローカル経済を基盤に社会を作り直そうという思想だった。私はその理念に心を揺さぶられ、日本にロハスを紹介し、「ロハスビジネスアライアンス」を立ち上げ、経営者たちと共に普及に尽力した。

さらに「国内で有機農業や自然エネルギー、ローカル経済を実践している地域はどこか」と考え、全国を訪ね歩いた。その成果として二〇一一年に『アグリ・コミュニティビジネス』を出版した。その中で紹介した一つが、宮城県大崎市の渡り鳥・マガンである。大崎市を含む宮城県北部は、日本最大のマガンの越冬地だ。

私がその存在を知ったのは、一枚の絵ハガキがきっかけだった。朝日を背景に飛び立つ何千羽のマガンの群れ。その姿は脳裏に焼きつき、いつか自分の目で見たいと思うようになった。夕刻、四方八方から鳴きながら群れて帰ってくるマガン。ねぐらである蕪栗沼に舞い降りる何千羽もの姿。羽音が空気を震わせ、冷たい北風に鳴き声が響いた光景は、私の胸を深く揺さぶった。

学芸出版社（2011年）

マガンと人々の共生に感動し、東日本大震災をきっかけに、この地域のPRに関わるように

やがて大崎市の地域づくりに関わるようになったころ、弟から祖父の出身地が隣の栗原市であることを知らされた。栗原もまたマガンの越冬地であった。祖父の故郷に飛来する鳥たちが、時を超えて私を呼び寄せたように思えた。

祖父がマガンを遣わし、父が山村の知恵を伝え、そして私は今、全国の農山村を巡っている。世界農業遺産（FAO）に認定された地域を訪ね歩き、人々の技や誇り、農産物の背景にある物語、四季折々の景観を愛し、未来へと伝えることに情熱を注いでいる。

子どもの頃の清流でのマス釣り、ふきのとうを見つけた歓び、飴色の燻製の薫り、冬空に舞うマガンの羽音・鳴き声。それらは一本の糸のようにつながり、祖父や父から私へ、そして次の世代へと受け継がれていく。自然と人との交わりは、過去から未来へと続く時の流れ。その流れの中で授かった贈り物を、私はこれからも大切にしていきたい。

夕刻、マガンが夜を過ごすために集まる「マガンのねぐら入り」。数万羽のマガンが空を覆う景色に圧倒される。大崎市の蕪栗沼には、マガン以外にも多くの鳥類が生息する野鳥の楽園である
写真提供：大崎地域世界農業遺産推進協議会

おおわだ・じゅんこ
教育テック大学院大学教授、事業構想学博士。総務省地域力創造アドバイザー。企業でマーケティングの実務を経て、2002年日本にロハスを紹介し著作や団体活動を通じて普及に尽力。2010年以降は福島・宮城・宮崎など各地で地域活性化を支援。
現在は教育DXと地域創生を結ぶ研究と実践を進め、持続可能な社会づくりを担う教育イノベーター育成に取り組んでいる。

いぶきの輪つか

日本の風土が紡いだ伝統の野菜や果実

地球上では、さまざまな動植物がたがいに助け合い、利用し合いながら生命を育んでいます。私たち人間もその環を形成する要素の一つです。生きものどうしの連環、そして、そこに関わる人間の役割がつくる〈輪っか〉について語っていただく、サイエンス・コラムです。

林 良博 東京大学名誉教授

伝統野菜・果実には明確な定義はないが、農林水産省のホームページでは、「主に日本各地で古くから栽培されてきた地方野菜・果実」を指す。従って、これらの野菜・果実は、その土地の気候や風土に適応し、独自の形や風味を持ち、ビタミンやミネラルが豊富で農薬や化学肥料に頼らず、自家採種を通じて育てられており、近年では地域の食文化を守るために、その価値が再評価されている。

ウィキペディア（Wikipedia）によれば、伝統野菜・果実は生産・流通・販売経費が高くつくため、一九七〇年代以降は大消費地向けにはほとんど消滅したという。しかし近年は、自家消費する農家などで栽培されていた伝統野菜・果実を「地域おこし」として、近くの都市向けには地産地消商品として、また大都市向けにはスローフード商品として売り出す戦略がみられるという。

日本に自生する野菜の種類

そもそも、日本の市場に出荷されている野菜のほとんどが海外から渡来したものである。もともと日本に自生していた野菜は、ウド、オカヒジキ、山椒（サンショウ）、自然薯（ジネンジョ）、じゅん菜（ジュンサイ）、芹（セリ）、蓼（タデ）、つる菜（ツルナ）、浜防風（ハマボウフウ）、菱（ヒシ）、蕗（フキ）、松菜（マツナ）、三つ葉（ミツバ）、茗荷（ミョウガ）、白藍（ハクラン）、ヤマゴボウ、ユリ、山葵（ワサビ）、牛蒡薊（ゴボウアザミ）、枸杞（クコ）など二十種類ほどだという。

日本に定着した渡来の野菜

ヨーロッパや中国、アジア諸国など、海外から渡ってきた数々の野菜は、日本各地に広がり、採種を繰り返すうちに、それぞれの土地の気候風土に適した野菜として形質が固定化し、地域野菜として定着した。

これらの野菜は、四十〜五十年前まで各地で当たり前に食され、地域の食文化に密接に関係してきた。たとえば、私が好きな信州の野沢菜漬けの野沢菜は、長野県下高井郡野沢温泉村を中心とした地域で栽培されてきた。

小舟に乗って手摘みする、昔ながらのじゅん菜の収穫
写真提供：一般社団法人東北観光推進機構

枸杞の実。中国では滋養強壮の漢方素材として使われる

野沢菜は寒冷な気候で育つ、アブラナ科の野菜
写真提供：長野県農政部

大量生産時代の到来

経済が高度成長期に入り、都市部への人口流入が加速すると、都市への生鮮食品の安定的な供給が求められるようになった。本来、旬に応じて収穫され、大きさや味には多少のバラつきが出て当り前の野菜に対しても、工業製品のように一定の量と質という均質化・規格化が求められるようになった。

そのため、どこでも誰にでも栽培できる育てやすい品種が選ばれ、広範囲で栽培され流通されるようになり、それ以外の在来種は徐々に栽培する農産者が減少してきた。さらに品種改良を行った野菜雑種第一代（F1品種）の育成が軌道に乗ってきた。F1品種が最初に作られたのは大正十五年に埼玉県農事試験場で作られたナスで、野菜では世界初だった。この成功を皮切りに全国各地でF1品種の作成が試みられ、高度成長期に入った頃にはF1品種の育成が軌道に乗った。

F1品種は、野菜の形や大きさの揃いが良く、成長も早く、同じ時期に一斉に収穫できる。これが時代のニーズに一致した。経済合理性の高いF1品採種ができる品種は、ほとんどがF1品種に変わった。このままでは在来種は絶滅の危機を迎えるだろうと危惧された。

花や果実、野菜を描いた「雑花果蔬図（ざっかからず）」は日本画によく見られる
雑花果蔬図、岩瀬鴎所筆、東京国立博物館蔵
出典：ColBase

在来種、固定種の復活

しかし、半世紀近くの間、自家需要などの栽培しかされなかった在来種に、再び注目が集まってきた。一九八〇年代半ば頃からの「地産地消」の流れに加え、二〇一三年に「和食」が無形文化遺産に登録されたことが大きな推進力となり、地域おこしの産品としても掘り起こしが活発化してきた。

こうして在来種は、「伝統野菜」、「地域野菜」と呼ばれるようになり、単なる「地産地消」の農産物としてだけでなく、地域の特産品、スローフードという新しい切り口での需要が喚起されつつある。

しかし、伝統野菜として復活したのは、かつての在来種、固定種のうちの一部だけであり、消滅してしまった品種は取り戻すことができない。

今後は、現存する伝統野菜が絶えることのないよう、知恵を絞って保存・継承していくことが望まれる。

はやし・よしひろ
1946年広島県生まれ。解剖学者、獣医師。国立科学博物館館長、東京大学総合研究博物館館長、山階鳥類研究所所長などを歴任。専門は動物資源科学。

近代学匠伝

デスコラ博士

コスモス国際賞 二〇一四年受賞者

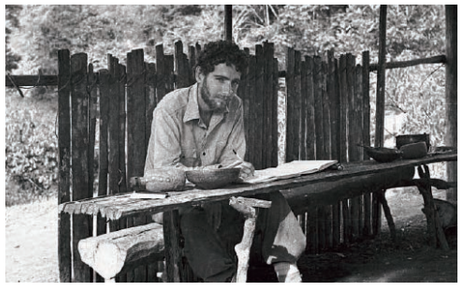
Dr. Philippe Descola

フィリップ・デスコラ博士

フィリップ・デスコラ博士は、21世紀の重要な思想家の一人にも数えられるフランスの文化人類学者です。南米アマゾンに住む先住民への綿密な調査をもとに、欧米で流布していた人間中心主義の考えに反駁し、自然と文化を切り離して考える二項対立ではなく、統合的に捉える「自然の人類学」を提唱しました。研究の集大成ともいえる著書『自然と文化を超えて』は人類学に〝転回〟をもたらした記念碑的著作として知られ、人類学や哲学にとどまらず、人新世の環境保護においても新たな視座を与えています。

フィリップ・デスコラ博士は一九七二年にフランス、パリ西ナンテール・ラ・デファンス大学（パリ第10）で哲学修士号及び民族学の学位を取得した後、第二回コスモス国際賞受賞者でもあるジャック・バロー博士の影響を受け、大学院で人類学と哲学を専攻。一九七六年から学友でもあった妻とともに南米エクアドル東部のヒヴァロア語族・アチュアの村落に三年間滞在し、集中的なフィールドワークを行いました。

博士はこの研究で、アチュアの人びとが自然の制約のもとで生きているのではなく、環境を利用することで新たな社会を生みだしていることを発見。人と自然は一線を画すものではなく、相互に依存しあう関係であることを明らかにしました。この研究成果は、博士の担当教授で現代思想に多大な影響を与えた文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの指導のもと博士論文にまとめられ、『飼い慣らされた自然』として後に書籍化。デカルト以来の西洋中心的な思想に一石を投じることとなったのです。



アチュアの人びとの熱帯雨林管理を調査する博士（1976〜1979年）

【コスモス国際賞】

地球の航路を探る

「自然と人間との共生」のため、統合的視点により環境と生命体・生命体同士の相互の作用等を研究した業績に与えられる「地球生命学」ともいうべき国際賞で、これまで32回を数えます。

受賞のポイント

◎共生の理念の形成、発展に寄与すること
◎地球的視点に立ち、長期的な視野をもつこと
◎総合的な視点での研究や活動であること

アチュアの人びとは栽培種、野生種、狩猟の獲物を、日常的に相互作用する擬人化された存在として捉えている

アマゾンの暮らしに学ぶ自然の社会で生きること

アチュアはアマゾン川上流部の河畔地帯と丘陵地という生態系の異なる環境に分散居住し、焼畑農耕と狩猟を主な生業にして暮らす民族です。二つの異なる環境が社会構造や文化的しきたりにどのような影響を与えるのか。博士はまず、その検証から始めました。土壌が肥沃な河畔地帯と貧弱な丘陵地帯では利用可能な資源は異なります。ところがどちらの土地に暮らす人びとも栄養摂取量やエネルギー消費量に違いは見られず、どちらも少ない労働で賢く生きており、彼らが社会生活を無条件に生態系に適合させてはいないことが示されました。

博士はさらに、森林における植物利用の共通点に注目します。アチュアの人びとは森林を伐採し、火をつけ新しい農地を開墾する前に野生植物の種子を現在使っている畑に植え替え、動物の糞便中の種子も移植や播種することで有用な野生種の保存を行ってきました。こうした営みが世代を超えて実践され、原生林よりもはるかに豊かな生物種を含む森林が形成されてきたのです。

「この事実は、アチュアの人びとが『自然の社会に生きる』ことを物語っています。人びとは森林を適応すべき自然の一部としてではなく、擬人化された存在の集合であり、日常的に関わり合うものと見なしてきたのです」。

「四つの存在論」を提唱し西洋中心主義に切り込む

擬人化された存在とは、人間と同じ魂を持った存在であり、アチュアでは動植物などの非人間（人間以外の全て）と人間の関係は人間同士の関係と実際的、概念的にも同一線上で考えられています。いわゆる、アニミズムの世界観です。

アチュアのアニミズムに触れた博士は、西欧社会に根付く、人間と非人間を別のものと考え、それが普遍であるとする世界観「ナチュラリズム（自然主義）」に疑問を投じます。そして、世界には文化に応じて「アニミズム」「ナチュラリズム」「トーテミズム」「アナロジズム（類推主義）」の四つの存在論があり、人と自然の間に「身体性（物質性）」と「内面性（精神性）」を想定することでそれらを同定する方法を提示しました。

二〇〇五年（日本では二〇二〇年）に刊行された『自然と文化を超えて』は、こうしたアチュアでの調査経験に基づく長年の研究の一つの到達点であり、人類学にパラダイムシフトをもたらす契機となったのです。

人と自然の関係性を表す「4つの存在論」

	身体性の連続	身体性の非連続
内面性の連続	**トーテミズム** 身体も内面もつながっている存在	**アニミズム** 身体は似ていないが内面はつながっている存在
内面性の非連続	**アナロジズム（類推主義）** 共通した身体を持ちながら内面は異なる存在	**ナチュラリズム（自然主義）** 身体も内面も異なる存在

『交錯する世界 自然と文化の脱構築 フィリップ・デスコラとの対話』（秋道智彌編・フィリップ・デスコラ寄稿）京都大学学術出版会、2018年

人と自然の関係性を多角的な視点で問い直す

二〇一四年にコスモス国際賞を

受賞した後、博士は自ら提唱した「四つの存在論」を図像・表象の領域に応用し展開する新たな研究に着手。たとえば自然主義が根付く西洋では遠近法や写実主義、アニミズム的な文化では動物の擬人化など、図像には、その文化の在り方が無意識的に表れます。これを読み解くことで人間の思考・信仰・世界理解の多様性を明らかにしようと試み、二〇二一年に出版された『Les formes du visible』に結実させています。

さらに二〇二三年にカリフォルニア大学バークレー校で行った講義をまとめた近著では、「人間と非人間の関係からつくられる世界」という視点から人新世における新しい政治のデザインに切り込み、二〇二四年には考古学と人類学の共同プロジェクトに参加。現在は「ランドスケープ」をテーマに人間と非人間の関係を再考する研究が進行中です。いずれもその根幹にはアチュアでの調査で精緻に分析した結果であり、人と自然との関係について問い直すものであることは間違いありません。

「周知の通り、地球規模の自然破壊は不可逆的な限界に達し、アマゾンにおいても、人と自然の関係はもはやかつてと同じものではありません。私たちはこの悲劇的ともいえる状況を背負い、非人間との共存を改めて学ばなければならないでしょう」。

アチュアは森の中に点在する家々で暮らし、家族単位で自給的な生活を営む

森を伐り開き作物を育てる一方で、動物との関係も深く、自然と共に生きる知恵がアチュアの文化に息づいている

叡智の人の足跡

1949年、フィリップ・デスコラ博士はフランスのパリで生まれました。父が歴史学者だったことから幼少時より多くの書物に触れ、夏には物理学者の祖父とピレネーの山々を歩き回る少年時代を過ごす中で、学問や自然に関心を寄せるようになっていきます。

サン・クルー高等師範学校に進学した博士は、フランスの人類学者の多くがそうであるようにまず、哲学を学びます。その後、パリ第10大学でクロード・レヴィ＝ストロースに師事。自然史博物館に研究員として勤務した際にはジャック・バローと出会い、レヴィ＝ストロースからは事象の根底にある構造やルールを探求する「構造主義」の方法論を、バローからは「人類と自然の接点の探求」というテーマを引き継ぎ、アチュアの体験を経て独自の理論へと発展させていきました。

博士号取得後は社会科高等研究院で教鞭を執り、2000年にコレージュ・ド・フランス「自然の人類学」講座の教授に就任。その後、社会人類学研究室所長、社会高等研究員研究主任を兼任し、2019年に退職したあとも調査や執筆、講演、講義と忙しい日々を送っています。

博士の研究が人類学や哲学にとどまらず、環境学や政治学にまで影響を与えていることは明らかで、レジオン・ドヌール勲章オフィシエや、フランス科学界の金メダルともいうべきCNRS（フランス国立科学研究センター）金賞など受章・受賞も多数。ピレネーの山々から始まった博士の人と自然をめぐる旅に、終わりはありません。

博士の近影。「四つの存在論」研究を結実させた後、20年間取り組んできた考古学と人類学の共同プロジェクトや、ランドスケープの比較人類学と定義できる新たなプロジェクトに取り組んでいる

日本植物紀行 12

監修
村上哲明

シーボルトが愛した「ユリの女王」カノコユリ

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動などの影響で、その生育地や個体数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。今では生育していない、失われた地域もありますが、その成果は「プラント・フォト・ハンティング」として、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータの中から、特徴的な種を取り上げて紹介します。

＊学会や展示会などへの動画（DVD）の貸し出しもしています。 https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html

カノコユリはユリ科ユリ属の球根植物で、山地や海岸の崖などに生える多年草。日本に自生する約十五種類のユリ属のひとつで、漢字では「鹿の子百合」と書きます。これは花びらの内側が、鹿の子絞り（染物）の模様に似ることから名付けられました。学名の種小名は「*speciosum*」で、こちらは「美しい」という意味のラテン語に由来します。

九州地方の福岡県、長崎県、鹿児島県、四国地方の徳島県、高知県のごく限られた地域にのみ自生する植物で、福岡県宗像市、長崎県佐世保市と西海市、鹿児島県薩摩川内市などでは市の花に制定されています。

絶滅の危険が増大している希少な生物種でもあり、環境省レッドリストでは「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」に分類。その原因は人の活動と関係が大きく、人里の開発や農業の機械化に伴う自然環境の変化により、カノコユリが自生する好適な環境が維持できなくなってきたからだといわれています。

開花時期は七月中旬～八月初旬と他のユリより少し遅咲き。斜面から垂れ下がるように伸びる茎は百～百五十センチ、長い小花柄の先に数輪の花を円錐花序に付け、花色は白、ピンク、赤など。花茎は十センチほどで花弁の先端が大きく反り返る優雅な姿も特徴的です。地下に鱗茎を有し、食用としても珍重されます。実の付ける時期は11月頃で、中の平たい種子は熟して裂けると風で散布されます。

花言葉は「慈悲深さ」「上品」「荘厳」など。日本では昔から観賞用として親しまれ、江戸末期に来日した医師・博物学者のシーボルトが愛したことでも知られています。シーボルトは帰国の際にカノコユリの球根を持ち帰って花を咲かせ、ヨーロッパの人々はその美しさから「ユリの女王」と讃えました。

九十九島（長崎県佐世保市）に咲くカノコユリ

学名：*Lilium speciosum*
分布：四国（徳島県、高知県）、九州（福岡県、長崎県、鹿児島県）、中国、台湾
開花期：7～8月

日本（国内）の分布

弓張岳（長崎県佐世保市）の道路脇に咲くカノコユリ

写真提供：西海国立公園九十九島ビジターセンター

普及啓発事業
自然と人間との共生フォーラム

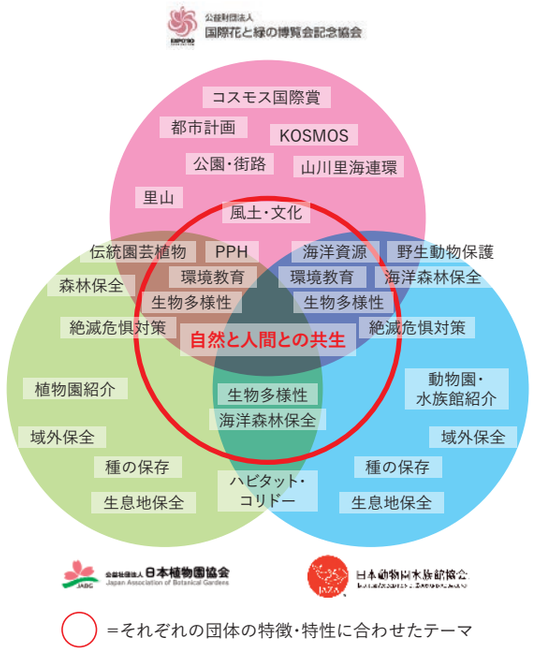
自然と人間との共生フォーラムは、花博記念協会、日本動物園水族館協会、日本植物園協会が共催している催しです。それぞれの設立の経緯・背景は違えども自然環境の保全、自然と人間との共生等、使命を同じくする三つの公益法人が根源的課題に向けてアプローチするもので、特色として花博記念協会は「緑地や公園、自然と人との文化、都市問題」を、日本動物園水族館協会は「陸上や海洋の飼育種や野生種などの動物に係ること」を、日本植物園協会は「地衣類や菌も含めた植物などに係ること」を基本に、団体の特徴を織り交ぜた内容構成です。

自然への眼差しを同じくする三団体が共催

自然と人間との共生フォーラムは、三団体が各年持ち回りで担当しています。当協会は第一回目の担当を務め、令和五年二月一日に開催。テーマは、「緑が育む生物多様性・生命のゆりかご」で、岩槻邦男氏（東京大学名誉教授、二〇一六年コスモス国際賞受賞者）が「生物多様性と人との関係は、資源の利用と保全として差し引き、損得勘定に合わせるだけでは持続性の確立は難しいでしょう。大昔のご先祖様たちが意識せずに自然をうまく保全してきた歴史を考えてみましょう」と話されました。次に山極壽一氏（総合地球環境学研究所所長、コスモス国際賞委員会委員長）がゴリラをテーマに「生物多様性が私たちにもたらしてくれる希望」と題して講演。「生態系の維持＝植物の繁茂＝果実の充実＝オス一頭の小さな単雄群が維持できる＝多くのオスがメスを獲得するためオスによる子殺しが起きない＝ゴリラ群れ社会の安定と持続性に貢献できる」という正の連鎖と、「生物多様性の減少による生息域の減少は、群の集団密度を増加させ、オスの競合性を高める。これはゴリラの糞による種子拡散にも影響を及ぼす、相互作用の総体である生態系全体の話」という負の連鎖についてのお話でした。

その後、川北篤氏（日本植物園協会理事、東京大学大学院理学系研究科附属植物園園長）、秋葉由紀氏（JAZA生物多様性委員会ライチョウ計画管理者、富山市ファミリーパーク）橋本佳延氏（兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部主任研究員）の三名による話題提供とパネルディスカッションが行われました。

公益法人3団体による普及啓発テーマのイメージ



＝それぞれの団体の特徴・特性に合わせたテーマ

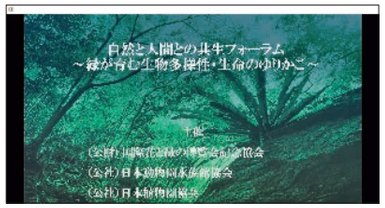
三者三様の立場から熱い議論が交わされる

それぞれの団体が推薦するパネリストは、毎回、多様な方々が登壇されます。この時は「送粉昆虫」「ライチョウの保全」「地域性種苗」をご専門とする登壇者より話題提供、ディスカッションが行われました。このようにバックグラウンドの異なる三名が一同に会するのは、三団体共催の醍醐味だと感じています。議論はコーディネータの湯本貴和氏の差配もあり、生物多様性の保全に向けて一つの方向性に帰結。皆様からも「自身の活動を外に発信する良い機会となった」、「専門分野以外の方と意見交換でき、今後の活動の励みとなった」と喜びの声を頂きました。

時間や場所の制約がないオンラインでの発信

運営面の特徴としてはオンラインへの特化が挙げられます。遠方やご多忙の方でも自身の都合の良い場所から視聴でき、YouTubeでの配信により繰り返し視聴することも可能です。広報も、環境への配慮や効率化からメール、SNSのみで催事の告知を行っています。

このように、省力化やコストカットしながら安定した集客を保っているのは、事業実施のノウハウを三団体で共有できていること、各団体の企画が個性的かつ、時代の趨勢を捉えているからだと自負しています。



オンライン発信だからこそ、画像を駆使した発表や議論が可能となった

これまでの開催概要

第2回（令和6年3月9日）

基調講演：中村雅之「いきものと共に歩む動物園水族館」シンポジウム：古根村幸恵「アマミトゲネズミ～域外保全の取り組み～」、小幡 晃「どっこい生きてる、里山・里浜のラン」、河野 甲「カタツムリの多様性と環境との関わり」、コーディネーター村井良子

第3回（令和7年2月20日）

細矢 剛「菌類：見えないけど、そこにいる大切な生き物」、松本淳「変形菌：「菌」と呼ばれるアメーバー」、末次健司「希少植物を支えるキノコのちから」、佐々木愛子「農業をするアリ ハキリアリ ～菌園と共に生きる～」、コーディネーター佐久間大輔

編集後記

花博記念協会では、平成21年に各地の伝統園芸の調査を行いました。肥後六花の一つ「肥後朝顔」は、細川家武士のたしなみとして育成を勧奨されたもので、展示の前日には朝顔の専用鉢の底前面に棒が入れられ、当日に棒が抜かれるそうです。これにより1輪の朝顔は、正座した者の真正面を向き、そこには、花と武士が対峙する精神空間があります。花への敬意、礼法は大事にしたいと思いを新たにしました。

（花博記念協会 S.M.）

『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

のとキリシマツツジ

能登の文化や歴史、美意識を今に伝える「生きた文化財」

のとキリシマツツジは、石川県能登地方に広く分布する江戸キリシマツツジ品種群の能登での呼び名。花期は四月下～五月中旬、葉を覆い隠すほど花が密集して咲くその印象的な深紅の花色が特徴的で、春の能登の再生や生命力の象徴として、人々の生活にも深く根付いています。

江戸時代を代表する「キリシマツツジ」は、17世紀に薩摩の霧島山から江戸に渡り、当時の園芸ブームの中で大変な人気を呼びました。その結果、品種改良が進み、多くの「○○キリシマ」と呼ばれるツツジが誕生し、全国に広まりました。

能登にキリシマツツジが伝来したのは一七〇〇年代と考えられています。近代以降、他の地域では多くの古木が失われてきましたが、能登では現在も樹齢百年以上の株が五百株以上保存され、日本一の規模を誇ります。これらは能登では「のとキリシマツツジ」と呼ばれ、地域の風土と深く結びついた存在として大切に受け継がれてきました。その大きな要因として、能登の気候に加え、個人宅の庭先や石垣の上など、ツツジの生育に適した場所に植えられ、大切に管理されてきたことが挙げられます。さらに、花の美しさから苗や枝を分け合い、近隣や次の世代へと受け継ぐ慣習が根づき、途切れることなく継承されてきました。

また「のとキリシマツツジ」は品種の多様性にも富み、地域ごとに特徴の異なる系統が残されている点も、他では見られない特徴です。

震災に負けず後世へ

「のとキリシマツツジ」は、能登地方特有の気候と長年にわたる人の手入れによって本来の樹形がよく保たれ、風格のある樹姿を見せます。通常は樹高約一～二メートルですが、珠洲市にある「大谷ののとキリシマツツジ」は、樹高三・五～四メートル、枝張り三～五・一メートルと非常に大きく、その文化的価値の高さから、「赤崎ののとキリシマツツジ」とともに石川県指定天然記念物となっています。

「のとキリシマツツジ」の多くは個人宅の庭や敷地内に植えられており、地域の人々の手によって守られてきました。しかし近年は、高齢化や過疎化の進行により、管理や継承の担い手不足が課題となっています。このような状況を受け、NPO法人などが中心となって保全や調査が行われ、苗木の育成や後継樹の確保、記録・情報発信などの取り組みが進められています。

また、この貴重な存在を一般の方々にも広く知ってもらうため、開花時期には個人宅や施設の庭を特別に公開する「のとキリオープンガーデン」が開催されています。二〇二四年は震災の影響により中止となりましたが、多くの関係者や愛好家の努力により、二〇二五年には無事再開され、訪れた人々の目を楽しませました。

（監修・倉重祐二）

[右]真紅の「本霧島」。のとキリシマツツジにはこのほか、色違いや花形の変異も含め7品種3系統が確認されています
[左]萬年寺 八景苑のとキリシマ苑（能登町）
写真提供：奥能登ウェルカムプロジェクト推進協議会

表紙の解説

「赤紅 あかべに」

赤紅とは艶やかで鮮やかな濃い赤色で、特に江戸時代に愛された染色技法に由来する。「赤」は一般的に力強い明瞭な赤を指す一方、「紅」は繊細な美しさや内面的な情動のニュアンスがある。「赤紅」はこれら両方の要素を併せ持つ。

［写真］のとキリシマツツジ（やなぎだ植物公園）、飛騨の赤かぶ、京都嵯峨野二尊院の紅葉、尚古荘（愛知県西尾市）、柘榴の果実

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
情報誌　KOSMOS――こすもす
第16号
2025年11月30日発行

発行　公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
〒538-0036　大阪市鶴見区緑地公園2番136号
TEL：06-6915-4500　FAX：06-6915-4524
URL：https//www.expo-cosmos.or.jp/

制作協力　株式会社アサック

©Expo'90 Foundation All rights Reserved